

自分の想いを伝えるために欠かせない日本語力 —リハビリテーション専門職を養成する専門学校で日本語検定を活用—

当校は、平成8年4月に開校した理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のリハビリテーション専門職を養成する4年制の専門学校です。10数年前より、臨床実習で敬語がスムーズに使えず、苦勞をした学生が増えたことがきっかけで、日本語検定を受検するようになりました。当初は理学療法学科の学生だけでしたが、最近では、言語聴覚学科も一緒に受検をしています。

医療系の学校の多くは、学内教育と学外教育（病院での実習）の2本立てで教育を行っていますが、実習となると、学生であっても、患者様の前では有資格者並みの接遇が求められます。最近では、場に合わせた会話ができずに“寡黙”でおとなしい実習生という印象を与える学生が増えてきました。そのような実情から、教育効果はこちらが期待するほどのものが得られなくなってきました。

たしかに、敬語を場に合わせて上手く使い分ける会話術は、短期間でマスターできるものではありません。どのように取り組もうかと思案していた時に、この日本語検定の案内があり、直ぐに受検を決めました。結果、全国一律の客観的評価を受けたことで、日々の言葉遣いの間違いを指摘しても、学生は素直に聞き入れるようになり、実習前のセミナーもスムーズに流れ、本番でも「患者様と話すのは楽しい」という感想を持つ学生が増えました。

また、“敬語”の習得から始まった日本語学習も、日々の記録を正しく書き伝えること、国家試験の長文問題を正確に理解し読解するためなど、益々必要となってきました。専門知識を問われる国家資格が、日本語を正しく理解できないために逃してしまうという現実、傍で見ているだけでも哀しいものです。

自分たちの想いを伝える有効な手段が、彼らの夢を閉ざす壁となっている現実、彼らはいつ気づくのか、そしてこの壁を打ちこわし乗り越えさせる私たち教員の役割も大きくなっています。

今、理学療法学科の3年生は、数年後に担うであろう“地域の集いの場”の企画に取り組んでいます。この企画は運動を行い元気で過ごしてもらうことを目的



学校法人山口コア学園
山口コ・メディカル学院
理学療法学科 村上博子 先生



としたものです。その教室のネーミングも、ちょっとした言い回しで相手に与える印象が変わってしまい、自分たちの想いとは全く異なってしまいます。私からそのことを指摘され学生たちは戸惑っています。どうして、自分たちの考えたものが正しく伝わっていないのか、一言では理解できないようです。言葉の意味、印象を2段階、3段階に連想させ説明しています。現在、学生たちは言葉の持つ意味を正確に知ることが自分たちの想いを正しく表現できることに気づき、挑もうとしています。

卒業後（免許取得後）、彼らは正しく美しい日本語を身に付けた方々を導かなければなりません。その時に、どれだけの表現力を発揮できるのでしょうか？セラピストとしての知識・技術も、言葉一つでその価値は変わってくることを実感することでしょう。